

1 二試薬間の血中BNP（脳性ナトリウム利
2 尿ペプチド）測定における検体の安定性の検討

3
4 小川貴史 末吉茂雄（千葉県循環器病センター
5 検査部検査科）

6
7 【目的】BNPは心不全の診断や、病態把握のマーカ
8 ーとして臨床的有用性が認められている。しかし、
9 BNPはタンパク分解酵素の影響を受け短時間であっ
10 ても検体の安定性に問題があるとの報告もある。今
11 回、異なる抗体を用いたBNP測定試薬による検体の
12 安定性を検討したので報告する。

13 【方法および結果】検体は当センター外来で
14 EDTA-2Na採血管による、採血後30分以内の100例
15 を用いた。測定は、各社専用試薬を用いCentaur CP
16 (Siemens:S法)とARCHITECT(Abbott:A法)におい
17 て検討した。1)二試薬間の相関は、S法をy軸とし
18 た回帰式は $y=1.00x+8.21$ $r=0.993$ であった。2)長
19 時間の室温での安定性は、採血直後から8時間まで
20 放置した10例の系時変化を確認した。採血直後を
21 100%とした8時間までの変化率の平均は、S法が
22 96.8~100.6%と有意差を認めなかった。しかし、A
23 法では82.9~90.2%と1時間経過時から低値傾向を
24 示した。3)さらに1時間室温放置による各検体の
25 影響を確認するため、28例において採血直後と1時
26 間放置の変化を比較した。変化率の平均値 $\pm 2SD$ は、
27 S法で $98.9\pm 8\%$ 、A法で $93.4\pm 14\%$ であり、A法の
28 み有意な低下を認め、割合は検体ごとに異なってい
29 た。

30 【考察】BNPは生理活性を持つため検体は不安定と
31 されてきたが、S法における安定性は良好であった。
32 しかし、A法では室温に1時間放置することで低値
33 傾向を認めていた。これは、測定試薬の抗体認識部
34 位が異なるためと推察される。BNP測定において、
35 日常検査では、再検査など測定までに時間を有する
36 こともあることから、試薬ごとに検体の安定性を確
37 認する必要があると考えられる。